

## 開拓者は心技体で挑む 構造家・宮田雄二郎

朝倉幸子◎TH-1  
illustration:Taco

1976年、宮田雄二郎さんは北海道の釧路に生まれた。「歴史的な建造物や史跡は少なく。ただ、毛綱毅曠さんが地元では有名で、個性的な建築に憧れました。」と開口一番に。筆者は同郷なので「よくわかります!」。設備設計事務所を経営している父親は、構造設計者になるという、建築家を目指すことを残念がったと笑う。建築に興味をもったのは、高校時代。放課後は画家のアトリエに通って絵を習い、対話を通して先生の自由で自然体な生き方に憧れた。また文系、理系そしてデザイン系か進路に悩んだときに、コルビジエの事を教わって、建築は領域を超えた学問ではないかと考えて進路を選択した。

横浜国立大学の建築学科へ入学し、その後大学院に進学して河端研究室を出る。意匠の設計課題が苦手だったが、当時開催されていたフェリックス・キャンデラの展覧会を見て、造り方から発想する建築デザインの道に進みたいと考えた。

宮田さんは大学院時代に、進路に悩みに悩んだ末、「どの道に進んでも健康であればなんとかなるだろう。」と考え、プロレスラーの道場に通って体を鍛えたという。「レスラーの力の入れ方、重心の崩し方、そして人間性を体感し、心技体の重要性を学んだ」というが、どこか構造設計にも通じるようです。

### ■裾野をひろげる

構造家・金田勝徳先生(本コラム第47回に登場)の大学院での講義に魅力を感じ、構造計画プラス・ワンに入所した。自ら学び研鑽し、誠実に構造に向き合う技術者としての倫理観と、「“できない”と言わない。できる方法を提案する。」といった建築に対する姿勢を学んだそうだ。その年月は実務を学ぶには十分な時間だったろう。構造家・金田勝徳先生的一面を、知ることができた覇志堂なのでした。木



造の設計に取り組んだ時に、稲山めり込み式を知って衝撃を受けた宮田さんは、働きながら、東京大学農学部の大学院で勉学に励む。稲山研究室の博士課程後期を満期退学し、博士号を取得した。稲山研究室では、特に耐力壁ジャパンカップでの学びが大きかったという。「私は鉄骨造の発想で耐力壁を設計していて惨敗した。毎回、木の特性を活かした稲山先生の壁に圧倒され、驚かされた」。その後は木質環境建築に在籍して、川原重明さんの元で大断面集成材建築物の木構造技術を経験。いよいよ宮田構造設計事務所を立ち上げ、住宅、教育施設、依頼される仕事はなんでも受けて忙しい日々を送る。そんなとき、大構造家の渡辺邦夫先生の「日曜学校 構造デザイン講座」に通い、技術に加えて、どのような建築を造るべきか、深く考える重要性を学んだ。それから構造デザインの実践に取り組むと決めたのです(執筆中に渡辺邦夫先生が逝去されました。合掌)。

### ■育成するロマン

現在、法政大学でデザイン工学部建築学科の専任講師の立場をもつ。事務所経営で人を雇った経験もあり、育成した彼らが活躍していくことが喜びだと語る。実弟にも構造設計を教え、今では一級建築士を取得して独立している。実は自分の得た知識をオープンにして、人を導き教えるのが天職の宮田さんだ。自然に存在している素材を用いて、時代を超える普遍的な建築をつくっていく。地球環境と共生する構造を教育の場で研究、実践していくのが目標の一つ。構造研究者としての立場で、郷里に文化をもたらしていく息子の姿を、釧路の父上が誇らしく思う日も近いのではないだろうか。